



Title	ケレウエ語のテンス・アスペクト : ジタ語の干渉による形式の変化と類似化
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2002, 12, p. 110-128
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/71102">https://doi.org/10.18910/71102</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ケレウェ語のテンス・アスペクト ージタ語の干渉による形式の変化と類似化ー

小森 淳子  
komo.junko@nifty.com

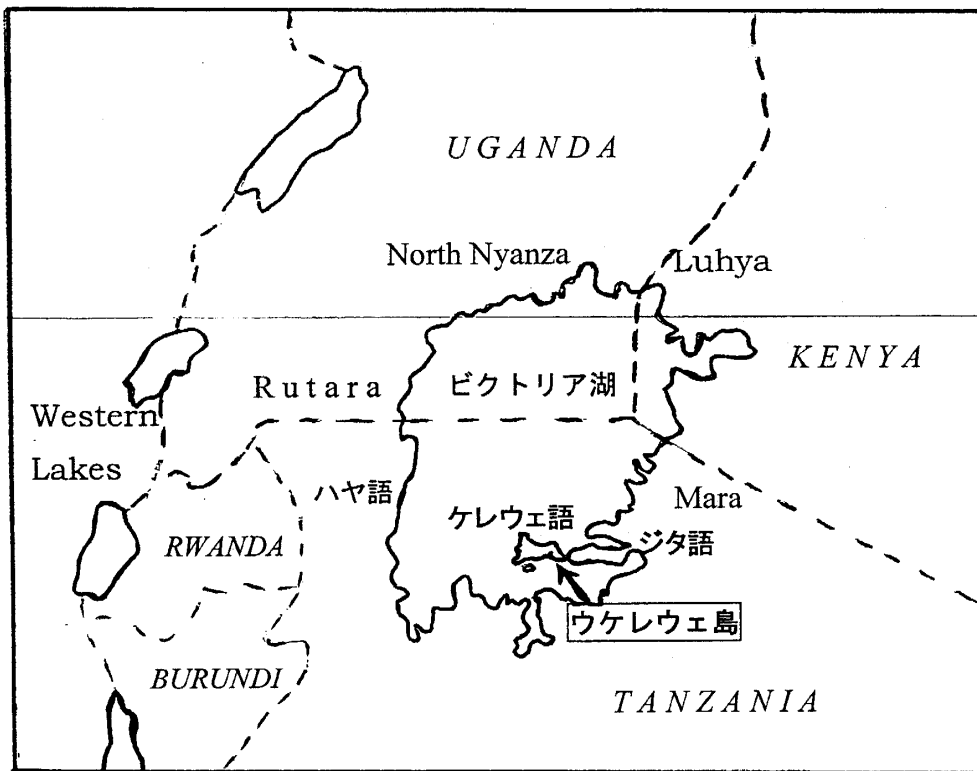
### 1. はじめに

ケレウェ語はタンザニアの北西部、ビクトリア湖南部のウケレウェ島で話されているバントゥ系言語の一つである。ジタ語も同じくバントゥ系の言語で、ウケレウェ島から東にかけて分布している。Ethnologueによると話者数は、ケレウェ語が約10万人、ジタ語が約21万人である。両言語はそれぞれビクトリア湖の西と東を故地としているが、ウケレウェ島に移住してきて以来、この島および周辺地域で共存している（地図参照）。

ケレウェ語とジタ語は地理的にも系統的にも近い関係にあり、バントゥ諸語の分類の基準とされている Guthrie の分類ではどちらも E ゾーンに属する<sup>1)</sup>。Schoenbrun(1990)はビクトリア湖周辺の言語群を“Great Lakes”と呼んでおり、そのメンバーや下位のグループ分けは、おおよそのところ Schoenbrun のものが基準となっている(Nurse 1999)。ここでもその名称に従って「大湖語群」と呼ぶ<sup>2)</sup>。大湖語群の下位分類は表1の通りである。

下位分類では異なる言語群に属するケレウェ語とジタ語は、ウケレウェ島で共存して以来、話者たちの二言語併用を引き起こし、接触の結果として言語自体がお互いに似るようになってきた。異なる言語が接触する状況が生じた場合、一般的に音韻・語彙・文法などが借用されてお互いに似通ってくることはよく知られていることだが(Dixon 1997)、ケレウェ語とジタ語の間にも、接触による言語変容の例を見ることができる。

本稿の目的は、両言語の接触による変容の一例として、ケレウェ語のテンス・アスペクト体系（TA体系）の形式をとりあげるものである。筆者がウケレウェ島で調査したケレウェ語のTA体系について報告し、同じくウケレウェ島で調査したジタ語の体系と比較しながら、ケレウェ語が受けてきた変容と両言語の類似化を明らかにする。



(地図) ビクトリア湖とウケレウエ島周辺地域

**Luhya グループ**

- North -- Gisu, Bukusu
- Central -- (other dialects)
- South -- Logooli, Idaxo, Isuxa

**East Nyanza グループ**

- Mara -- Gusii, Kuria, Ngurumi, Suba, Ngurimi, Simbiti, Shashi, Nata, Zanki
- Suguti -- ジタ語, Kwaya, Ruri, Kara

**West Nyanza グループ**

- Rutara -- ケレウエ語, Haya, Nyambo, Zinza, Nyoro, Tooro, Nkore, Ciga
- North Nyanza -- Ganda, Gwere, Soga, Syan

**Western Lakes グループ**

- West Highlands -- Rwanda, Rundi, Shubi, Hangaza, Ha, Vinza
- Forest -- Tembo, Hunde, Haavu, Mashii, Fuliiru, Viira
- Rwenzori -- Konzo, Nande, etc.
- Kabwari (single language)

Gungu (single language; at the northeast end of Lake Albert)

表1 大湖語群(Great Lakes)の分類 (Schoenbrun 1990)

## 2. ケレウェ語のTA体系

ケレウェ語とジタ語のTA体系について、筆者が調査した結果をまとめると表2、表3のようになる。表の縦の列はテンス、横の列はアスペクトの項目である。〈単純形〉の列はアスペクトに関与しないテンスのみの形式である。このTA体系表はケレウェ語と同じルタラグループに属するハヤ語のTA体系を取り上げた先行研究(Nurse & Muzale 1999)を参考にしてまとめたが、〈完了〉の列を3つに区分した点が異なっている。

ルタラグループの多くの言語がそうであるように、ケレウェ語のテンスは、「遠過去」「昨日の過去」「今日の過去」「現在」「近未来」「遠未来」の6つの形式に分けることができる。またアスペクトは、「進行」「習慣」「継続」「完了」の4つに分けることができる。これはジタ語においても同じである。以下にジタ語との比較を混ぜながら、ケレウェ語のTA体系について概観していこう。

### 2.1 テンス

表2の〈単純形〉の列が6つのテンスの形式である。「過去」を3つに、「未来」を2つに、そしてそれ以外の時制として「現在」に分けることができる。「過去」は明らかに過去に起こった事実を述べるものであるが、未来と現在は時間軸上の時点を目指すことは含意であって、必ずしもその指示のために用いられるものではない。ここでは形式を区別する表示として「現在」、「未来」という語を用いるが、「未来」はむしろ義務や可能性を表すムードと関連していると考えられる。以下にそれぞれのテンスをみていく。

#### 2.1.1 現在

「現在」の単純形は主格接辞と動詞からなる一種の無標形で、時間の流れとは関係のない事態や状態を表す。下の(1)~(3)は〈現在・単純形〉<sup>3)</sup>の例であるが、これらは現時点を表すことを意図するものではなく、動詞によって表される行為や状態それ自体を提示する形式である。(2)の例は主格接辞と動詞の間に対格接辞が入っている。

- (1) íne n-tuul-a Nansyo. 私はナンシオに住んでいる<sup>4)</sup>。

I 1s-live-E Nansio

- (2) obwita m-bú-ly-a. 私はウガリは食べます。

ugali 1s-OP-eat-E

- (3) o-gamb-a kí? 調子はどうですか(〈何を言いますか〉《慣用句》)

2s-say-E what

表2 ケレウェ語のTA体系 (Sは主格接辞、Vは動詞語幹、( )内の要素は任意)

	〈単純形〉	進 行	習 慣	継 続	完 了		
					(状 態)	(完 了)	(遠完了/経験)
遠過去	S-ka-V-a	S-a-li-ga ni-S-V-a	S-a-V-a-ga	S-a-li-ga S-ki-V-a	S-a-li-ga S-V-ile	S-a-li-ga S-a-V-ile	S-a-li-ga S-la-V-ile
昨日の過去	S-V-ile		—				—
今日の過去	S-a-V-a	sanga ni-S-V-a	—	sanga S-ki-V-a	sanga S-V-ile	sanga S-a-V-ile	—
現在	S-V-a	S-ku-V-a	S-ku-V-a-ga	S-cha-V-a	S-V-ile	S-a-V-ile	S-la-V-ile
近未来	S-la-V-a	S-ku-ba ni-S-V-a S-la-ba-ga ni-S-V-a	S-la-V-a-ga	S-ku-ba S-ki-V-a S-la-ba-ga S-ki-V-a	S-ku-ba S-V-ile S-la-ba S-V-ile	S-ku-ba S-a-V-ile S-la-ba S-a-V-ile	—
遠未来	S-li-V-a	S-li-ba(-ga) ni-S-V-a	S-li-ba(-ga)ni-S-V-a	S-li-ba(-ga) S-ki-V-a	S-li-ba S-V-ile	S-li-ba S-a-V-ile	—

表3 ジタ語のTA体系 (Sは主格接辞、S'は接頭母音付の主格接辞、Vは動詞語幹、( )内の要素は任意)

	〈単純形〉	進 行	習 慣	継 続	完 了		
					(状 態)	(完 了)	(遠完了/経験)
遠過去	S-a-V-iyé	S-a-li-ga ni-S-V-a	S-a-li-ga ni-S-V-a-ga	S-a-li-ga S-chaa-V-a	S-a-li-ga S-V-iyé	S-a-li-ga S-a-V-iyé	—
昨日の過去	S-a-maa-V-a		—				—
今日の過去	S-a-V-a	S-a-li ni-S-V-a	—	S-a-li S-chaa-V-a	S-a-li S-V-iyé	S-a-li S-a-V-iyé	—
現在	S'-V-a		S'-V-a-ga	S-chaa-V-a	S-V-iyé	S-a-V-iyé	S-la-V-iyé
近未来	S-la-V-a	S'-ba ni-S-V-a S-la-ba-ga ni-S-V-a	S-la-ba-ga ni-S-V-a-ga	S'-ba S-chaa-V-a S-la-ba-ga S-chaa-V-a	S'-ba S-V-iyé S-la-ba-ga S-V-iyé	S'-ba S-a-V-iyé S-la-ba-ga S-a-V-iyé	—
遠未来	S-li-V-a	S-li-ba(-ga) ni-S-V-a	S-li-V-a-ga	S-li-V-a(-ga) S-chaa-V-a	S-li-ba-ga S-V-iyé	S-li-ba(-ga) S-a-V-iyé	—

現在の進行している動作はアスペクトによって表示される。下の例は進行を表すアスペクト接辞 *ku-*がついた例である。

- (4) *n-ku-ly-a obwita.* 私はウガリを食べています。 〈現在・進行〉

*1s-Pro-eat-E ugali*

- (5) *o-ku-z-a hai?* どこへ行くのですか。 〈現在・進行〉

*2s-Pro-go-E where*

ジタ語は現在の進行している動作も単純形で表す。つまり〈現在・単純形〉と〈現在・進行〉を形式的に区別しない。そして〈現在・単純形/進行〉で用いられる主格接辞は、一般の主格接辞とは異なり、接頭母音(*augment*)のついた形である。一般の主格接辞は動詞の前に *TA* 標識や否定接辞が入る時などに用いられるのに対して、*TA* 標識や否定接辞がなく動詞に直接つく単純形のような場合に、接頭母音つきの主格接辞が用いられる<sup>5)</sup>。下の(6)(7)がそのジタ語の例である。(6)は習慣や可能の意味で「私はウガリを食べる」ということを表しているとも、「食べている」という進行を表しているとも解釈できる。(7)は進行を表す。

- (6)Jita: *obusima eni-bú-ly-a.* ウガリは私は食べます／ウガリを私は食べています (進行)

*ugali S1s-OP-eat-E*

- (7)Jita: *ou-j-a akí?* どこへ行くのですか。

*S2s-go-E where*

### 2.1.2 過去

単純形において「過去」は3つの形式に区分することができる。ここでは、それぞれ指示する時点がおおよそ示されるように、おととい以前の過去を指す「遠過去」、「昨日の過去」、「今日の過去」と呼ぶ<sup>6)</sup>。下は3つの過去の単純形の例である。

- (8)a. *n-ka-gul-a enfwí.* 私は魚を買った (おととい以前) 〈遠過去〉

*1s-FP-buy-E fish*

- b. *n-guz-ile enfwí.* 私は魚を買った (昨日) 〈昨日の過去〉

*1s-buy-Prf fish*

- c. *n-a-gul-a enfwí.* 私は魚を買った (今朝／さっき) 〈今日の過去〉

*1s-Pst-buy-E fish*

「昨日の過去」を表す形式に用いられている接尾辞 *-ile* は完了を表し、動詞によっては同じ形式で現在の状態を表すことがある。つまり、ある動作や変化の結果生じた状態を表すような場合である。下の(9)(10)がその例である。

- (9) a-nagi-ile. 彼は寝ている。〈現在・状態〉

3s-sleep-Prf

- (10) a-humw-ile. 彼は休んでいる。〈現在・状態〉

3s-rest-Prf

〈昨日の過去・単純形〉と〈現在・状態〉が同じ形式であるのは、完了語尾をもつ形式が「過去」を表すようになったという変化が考えられる。「完了」は「近い過去」に容易に転じていくことができ、Suguti と W.Highlands グループ以外すべての大湖語群の言語で、完了語尾をもつ S-V-ile という形式が何らかの過去を表している (Nurse & Muzale 1999:532)。

ジタ語では「昨日の過去」は完了語尾ではなく、動詞の前におかれる時制接辞を用いて表す。以下の例は、ジタ語の「昨日の過去」の例である。

- (11) Jita: wa-a-maa-gúl-a kí?<sup>7)</sup> あなたは何を買ったの？

2s-Pst-Yps-buy-E what

- (12) Jita: na-a-maa-j-a liigolo. 私はきのう来た。

1s-Pst-Yps-come-E yesterday

ケレウェ語にしろジタ語にしろ、単純形では「過去」は3つに区分されるが、アスペクトと組み合わされた複合形式では2つにしか区分されない。つまり、「進行」や「継続」などの過去を表す複合形式をみると、「遠過去」と「昨日の過去」が同じ形式になっている。これらの複合形式では「昨日以前の過去」と「今日の過去」の2つの区分しかないことになる。このことから考えられるのは、単純形において〈昨日の過去〉はあとから発展したものではないかということである。ケレウェ語においては「完了」から転じたものであり、ジタ語においては、maa-という接辞が新たに加えられたと考えることができる<sup>8)</sup>。

複合形式においては、〈遠過去〉と〈昨日の過去〉という区別が「昨日以前の遠い過去」という一つにまとめられる。単純形に現れる〈遠過去〉や〈昨日の過去〉と区別するために、複合形式における昨日以前の過去を〈遠い過去〉と呼ぶことにする。複合形式の〈今日の過去〉とともに例を見ておこう。下の例のそれぞれ(a)の例は昨日以前に起こっていたこと、(b)は今日のどの時点かで起こっていたことを表している。

- (13) a. n-a-li-ga ni-n-dy-a obwita. 私はウガリを食べていた。〈遠い過去・進行〉

1s-Pst-BI-IS Cnt-1s-eat-E ugali

- b. sanga ni-n-dy-a obwita. 私はウガリを食べていた。〈今日の過去・進行〉

(NP) Cnt-1s-eat-E ugali

- (14) a. ba-a-li-ga ba-ki-kol-a emilimo. 彼らはまだ仕事をしていた。〈遠い過去・継続〉  
 3pl-Pst-BI-IS 3pl-still-do-E work  
 b. sanga ba-ki-kol-a emilimo. 彼らはまだ仕事をしていた。〈今日の過去・継続〉  
 (NP) 3pl-still-do-E work

ただし、〈習慣〉と〈遠完了/経験〉では〈遠過去〉と〈昨日の過去〉の区別がなくなるのではなく、〈遠過去〉にのみあらわれる。つまり〈今日の過去〉や〈昨日の過去〉とは共起しないということである<sup>9)</sup>。この点については後述のアスペクトの節でみる。

### 2.1.3 未来

未来時制は〈近未来〉と〈遠未来〉の2つに分けられる。それぞれ動詞の前にくる時制接辞 *la-* と *li-* によって表される。これはケレウェ語、ジタ語とも同じ接辞であり、また大湖語群全体にも広くみられる形である<sup>10)</sup>。しかしこれらが実際に「未来」を意味しているかどうかは定かではない。特に〈近未来〉は依頼や義務、可能性などを表すムードと関連していると考えられる。下の(15)~(17)の例は〈近未来〉の例であるが、*la-*で示される動詞が近い未来に起こることを述べているのではなく、その当為を表していると考えられる。

- (15) a-la-fúluk-a. 彼は引っ越すだろう/引っ越すべきだ。〈近未来・単純形〉  
 3s-NF-move away-E  
 (16) o-la-n-gul-il-a-yo ipapo. 私にそこでタバコを買ってきてよ。  
 2s-NF-1s-buy-appl-E-there tobacco  
 (17) n-di n'emilimo, o-la-iz-a néncha. 私は仕事があるので、明日来て下さい。  
 1s-BI and-work 2s-NF-come-E tomorrow

一方、*li-*で示される〈遠未来〉の方はずっと先の未来を示すように見える。下の(18)の二つの例文を比べてみるとそれが分かる。

- (18) a. a-la-ba déreba. 彼が運転手になる/なればいい。〈近未来・単純形〉  
 3s-NF-Bb driver  
 b. a-li-ba déreba. 彼は運転手になるだろう。〈遠未来・単純形〉  
 3s-FF-Bb driver

(18.a)はこれから車で出かけようというとき、誰が運転するかを話していて、運転できる人を指して「彼が運転手になればいい」というような状況で用いられる。(18.b)は、たとえば小さな子供が車で遊ぶのが好きで、車の運転のまねごとばかりしているのを見て、「この子は将来、運転



手になるだろうね」というような発話で用いられる。しかし、この〈遠未来〉も話者の推測や可能性などのムードと関連しているとも考えられる。次の例では、la-と li-が可能性の大小の違いを表していると考えられる。

(19) a. ka-a-la-z-a-yo, ba-ku-mw-iluch-a. 彼がそこへ行っても、追いつかれるよ。

IF-3s-NF-go-E-there 3pl-Pro-3s-drive away-E

b. ka-a-li-z-a-yo, ba-li-mw-ilucha. 彼がそこへ行っても、追いつかれるだろう。

IF-3s-FF-go-E-there 3pl-FF-3s-drive away

(20) a. ka-n-da-z-a Bukerebe, n-ku-maam-a owa Tungaraza.

IF-1s-FF-go-E Ukerwe 1s-Pro-sleep-E of Tungaraza's

私はウケレウェへ行ったら、トゥンガラザの所で泊まります。

b. ka-n-di-z-a Bukerebe, n-di-maam-a owa Tungaraza.

IF-1s-FF-go-E Ukerwe 1s-FF-sleep-E of Tungaraza's

私はウケレウェへ行ったら、トゥンガラザの所で泊まることになるでしょう。

それぞれ前半部分は条件を表す節で、後半部分はその帰結を表している。それぞれ(a)の条件節では la-、(b)では li-が用いられているが、その違いはそれがどのくらい遠い未来に起こるかというよりも、それが起こる可能性の大小の違いを表している。帰結部分では、(a)は〈現在・進行〉の接辞 ku-が用いられている。(b)では条件節でも帰結節でも遠未来の接辞 li-が用いられているが、(a)の帰結節では la-は不可である。この点から見ても、近未来の接辞 la-は単に近い未来のことを表す接辞ではないと考えられる。

(a)の帰結節に現れているように〈現在・進行〉の形式は近い未来や意志も表す。(21)は ku-を用いる〈現在・進行〉の形式が近い未来や意志を表している例である。

(21) a. O-ku-gend-a lihi? あなたはいつ行くのですか。

2s-Pro-go-E when

b. N-ku-gend-a habwooyo. 私は日曜日に行きます。

1s-Pro-go-E sunday

また近い未来や意志を表す形式には、動詞「来る」の〈現在・進行〉の形に不定形を加えた S-ku-iza ku-V という形がある。大湖語群の他の言語にも広く見られる形であり、ジタ語にも同じパターンの形式 S'-ja oku-V がある。これは〈現在・進行〉の形式が近い未来や意志を表すよりもさらに明確に、すぐ先の未来や意志を示す。TA体系の形式として文法化していると考えられるなら一覧表の近未来の項に加えることも可能であるが、ここでは加えていない。(22)がケレウ

エ語の例、(23)がジタ語の例である。

(22)a. N-kw-iza ku-nwa amaalwa. 私は酒を飲むつもりだ。

1s-Pro-come Inf-drink native beer

b. A-kw-iza ku-fwâ. 彼はもうすぐ死ぬだろう。

3s-Pro-come Inf-die

(23)Jita: Kaa-ja oku-fwâ. 彼はもうすぐ死ぬだろう。

S3s-come Inf-die

## 2.2 アスペクト

アスペクトの形式は、大きく「進行」「習慣」「継続」「完了」の4つに分けられる。「完了」のアスペクトはさらに3つに分けてあるが、「完了」の形式はすべて、動詞が完了語尾(-ile/Jita:-iye)をもっている。基本的なアスペクトの形式はTA体系表の「現在」の行に示されている通りである。「過去」や「未来」のテンスと組み合わせられるとき、「習慣」のアスペクト以外は、複合形式で表わされる。

### 2.2.1 進行

2.1.1節で見たように、ケレウェ語の〈現在・進行〉は接辞ku-を用いるが、ジタ語では主格接辞のみの単純形と同じである。どちらの言語も「過去」や「未来」の進行相は複合形式で、後部要素はni-S-V-aという形になる。この後部要素の形は、他のルタラグループの言語、たとえばハヤ語、ンコレ語、ニヨロ語などの〈現在・進行〉の形式と同じである。主格接辞の前のni-は進行を表すcontinuous prefixである。他のルタラ諸語の〈現在・進行〉の例を(24)に見てみよう。

(24)a. ni-tu-gur-á. “we are buying” (ハヤ語/ンコレ語; Nurse & Muzale 1999:522)

Cnt-1pl-buy-E

b. ni-ba-kor-a. “they are working” (ニヨロ語; Rubongoya 1999:175)

Cnt-3pl-work-E

ルタラ諸語でこの形式が〈現在・進行〉を表す形式として一般的であり、またケレウェ語でも複合形式ではこのni-を用いる形式が見られることから、ケレウェ語においては〈現在・進行〉でもni-を用いる形式が使われていたと考えることもできる<sup>11)</sup>。

## 2.2.2 習慣

〈現在・習慣〉を表す形式は、ケレウェ語、ジタ語とも〈現在・進行〉の形式に接尾辞-ga を加えた形になっている<sup>12)</sup>。以下のような例がある。

(25)a. N-ku-nw-a-ga echái keebázyo. 私はいつも夕方にチャイを飲みます。〈現在・習慣〉

1s-Pro-drink-E-IS chai evening

b. Jita: Kaa-nyw-a-ga iisigala. 彼はタバコを吸います。〈現在・習慣〉

S3s-drink-E-IS cigarette

(26)a. O-ku-ba-bwach-á-ga? あなたはいつも彼らに挨拶していますか。〈現在・習慣〉

2s-Pro-3pl-greet-E-IS

b. Jita: Ou-ba-keesy-á-ga? あなたはいつも彼らに挨拶していますか。〈現在・習慣〉

S2s-3pl-greet-E-IS

また 2.1.2 節で触れたように、〈習慣〉のアスペクトはその意味から〈昨日の過去〉や〈今日の過去〉のテンスとは共起しない。過去のテンスでは〈遠過去〉とのみ共起する。未来のテンスでは〈近未来〉、〈遠未来〉と共起し得る。これはケレウェ語、ジタ語ともに同様であるが、形式は異なる。それぞれの例を以下に見てみよう。

(27)a. n-a-ly-a-ga obwita. 私はウガリを食べていた。〈遠過去・習慣〉

1s-Pst-eat-E-IS ugali

b. Jita: na-a-li-ga ni-n-dy-a-ga obusima. 私はウガリを食べていた。〈遠過去・習慣〉

1s-Pst-BI-IS Cnt-1s-eat-E-IS ugali

(28)a. n-da-sigis-a-ga enkumba. 私はずっと粥を作るでしょう。〈近未来・習慣〉

1s-NF-stir-E-IS porridge

b. Jita: n-da-ba-ga ni-n-juuj-a-ga obúsala. 私はずっと粥を作るでしょう。〈近未来・習慣〉

1s-NF-Bb-IS Cnt-1s-stir-E-IS porridge

(29)a. a-li-ba(-ga) na-a-nw-a esigala buli lunáku. 彼はタバコを毎日吸うだろう 〈遠未来・習慣〉<sup>13)</sup>

3s-FF-Bb-IS Cnt-3s-sdrink-E cigarette everyday

b. Jita: a-li-nyw-a-ga iisigala kuusíku. 彼はタバコを毎日吸うだろう 〈遠未来・習慣〉

3s-FF-drink-E-IS cigarette everyday

ケレウェ語の〈遠過去・習慣〉の形式には、新しい形が観察されている。これは〈遠過去〉を表す複合形式が変化していることを示しているが、この点については3節で詳述する。

### 2.2.3 継続

「継続」とは現在進行している状態が過去から続いていることを表し、「まだ～している」という意味になる。

(30) a-cha-nw-a amaalwa. 彼はまだ酒を飲んでいる。〈現在・継続〉

3s-STILL-drink-E native beer

継続アスペクトを表す接辞は、ジタ語ではどのテンスも chaa-になっているが、ケレウェ語では〈現在〉では cha-、それ以外のテンスでは ki-が用いられている。Muzale(1998)はルタラ諸語の継続アスペクトを表す接辞として、\*ki-aa-という形を再建している。分析的に見ればケレウェ語の〈継続〉を表す接辞は ki-で、〈現在・継続〉のアスペクト表示も ki-a-と分けることができるかもしれないが、この形は常に cha-と実現されるので、このように表記する。

### 2.2.4 完了

完了を表すアスペクトは、動詞に完了の接尾辞-ile をつけて表されるが、他のTA標示の要素との組み合わせによって、さらに3つに分けることができる。それぞれ仮に〈状態〉、〈完了〉、〈遠完了/経験〉と名づけてみた。

〈現在・状態〉の形式は S-V-ile で、これは〈昨日の過去・単純形〉と同じである。この形式は動作を表す動詞の場合「昨日の過去」を意味するが、「死ぬ」や「寝る」、「休憩する」、「結婚する」など変化を表す動詞がこの形式をとると、変化のあとの現在の状態を意味する。〈状態〉を表す例は上の(9),(10)、〈昨日の過去〉を表す例は(8b)に見た通りである。

〈完了〉は文字通りある動作や変化が完了したことを示すもので、次のような例がある。

(31)a. Y-a-fw-ile. <sup>14)</sup> 彼は死にました。〈現在・完了〉

3s-Pst-die-Prf

b. N-a-lí-ile. 私はもう食べました。〈現在・完了〉

1s-Pst-eat-Prf

c. W-a-maz-ile ku-fúla? もう洗濯し終わった? 〈現在・完了〉

2s-Pst-finish-Prf Inf-wash

ジタ語の〈現在・完了〉の形式は〈遠過去・単純形〉と同じである。〈遠過去・単純形〉の方は完了の接尾辞のアクセントを高く発音するようであるが、これもケレウェ語の〈現在・状態〉と〈昨日の過去・単純形〉が同じ形式であることと並行的に捉えることができよう。ケレウェ語では完了語尾をもつ形式 S-V-ile が〈昨日の過去〉を表すのに対して、ジタ語では完了語尾をも

つ形式 S-a-V-iyé が〈遠過去〉を表すということである。ジタ語の例を見ておこう。

(32) a. Jita: Wa-a-jí-iyé Mwanja? あなたはムワンザへ行きましたか。〈遠過去・単純〉

2s-Pst-go-Prf Mwanza

b. Jita: Na-a-lí-iyé. 私はもう食べました。〈現在・完了〉

1s-Pst-eat-Prf

〈遠完了／経験〉とは、ある動作の完了が普通の〈完了〉に比べてずっと前の時点に起こったことを示すもので、「とっくの昔に終わった」というような意味の完了である。また、動作を表す動詞では「とっくの昔にそれをやり終えた」ということから、「それをやったことがある」という経験を表す意味にもなりえる。

(33)a. taata a-la-fw-íle. 父は（とうの昔に）死にました。〈現在・遠完了〉

father 3s-FPrf-die-Prf

b. a-la-fúluk-ile. 彼はとっくに引っ越しました。〈現在・遠完了〉

3s-FPrf-move away-Prf

(34)a. n-da-bú-li-ile obwita. 私はウガリを食べたことがある。〈現在・経験〉

1s-FPrf-OP-eat-Prf ugali

b. a-la-genz-ile Mwanza. 彼はムワンザに行ったことがある。〈現在・経験〉

3s-FPrf-go-Prf Mwanza

〈遠完了／経験〉は普通、過去や未来の時制とは共起しない。ジタ語では〈遠完了／経験〉は〈現在〉の形式しかなく、複合形式ではあらわれない。ケレウェ語では表2にあるように〈遠過去・遠完了／経験〉があるが、これは筆者が作文して作ったものの可否を尋ねたらOKだったので加えてあるが、実際に用いられるのかどうか疑問が残る。この点についてはさらなる調査が必要である。

以上、ケレウェ語のテンス・アスペクトの形式について、ジタ語との比較を混ぜながら概観した。テンスを6つの形式に、アスペクトを4つの形式（下位分類も含めると6つ）に分けたが、この区分は大湖語群の一般的な特徴でもある。しかし、個々の形式については違いがある。特にケレウェ語の過去の複合形式は、同系のルトラ諸語には見られない形式であり、ジタ語の影響が及んだと考えられる部分と、独自に変化した部分が見られる。その点について次節でみていこう。

### 3. ケレウェ語のTA形式の変化

#### 3.1 ジタ語による影響

Muzale はルタラ諸語の中のいくつかの言語が、隣接する別グループの言語から影響を受けて、TA形式の一部を変化させていることを指摘している。その中でケレウェ語がスグティグループから影響を受けた例として、〈遠過去・進行〉の例をあげている (Muzale 1998:235)。Muzale によるとケレウェ語の〈遠過去・進行〉の複合形式にみられる前部要素 S-a-li-ga は、他のルタラ諸語には見られない形式で、スグティ諸語の影響であるという。表2, 3を見比べても分かります、ケレウェ語、ジタ語の〈遠い過去〉を表す複合形式はどちらも S-a-li-ga という形式をもち、両言語の接触の結果みられる変容と類似化を示す例と考えることができる。

この類似化がジタ語からの影響によってケレウェ語が変容した結果だと考えられるのは、Muzale が指摘するように、他のルタラ諸語には見られない形式であることと、さらに筆者の観察するところによると、この形式への変化がケレウェ語の〈遠過去・習慣〉においても見られる、現在も進行している変化だからである。

ケレウェ語の〈遠過去・習慣〉の形式は(27.a)でみた例の通りである。これは本来のケレウェ語の形式であり、年配者はこの形を用いるが、2～30歳代の若い世代では新しい複合形式 aaliga ni-S-V-a-ga という形を用いる。下に例をみてみよう。それぞれ(a)が本来の形式、(b)が新しい形式の例である。

(35)a. n-a-ly-a-ga obwita. 私はウガリを食べていた。〈遠過去・習慣〉 (=27.a)

1s-Pst-eat-E-IS ugali

b. aaliga ni-n-dy-a-ga obwita (新しい形式)

(FP) Cnt-1s-eat-E-IS ugali

(36)a. tw-a-nw-a-ga esigala buli lunaku. 私たちは毎日タバコを吸っていた。〈遠過去・習慣〉

1pl-Pst-drink-E-IS cigarette every day

b. aaliga n-tu-nw-a-ga esigala buli lunaku. (新しい形式)

(FP) Cnt-1pl-drink-E-IS cigarette every day

〈遠過去・習慣〉の形式が、年配者の用いる(a)の形式から若い世代の用いる(b)の形式へと変化していると考え、これはケレウェ語の過去の複合形式がすべて分析的になり、しかもジタ語と共通する前部要素 S-a-li-ga という形をもつにいたる変化の最終段階と位置づけることができよう。ケレウェ語では〈習慣〉以外のアスペクトにおいて過去はすべて複合形式になっており、〈遠

過去・習慣〉だけがそうでないという体系の不均衡がこの変化を促していると考えられる。ジタ語の〈遠過去・習慣〉の例をみると、ケレウェ語の新しい形式が類似していることが分かる。

(35)c. Jita: na-a-li-ga ni-n-dy-a-ga obusima. 私はウガリを食べていた。〈遠過去・習慣〉(=27.b)  
1s-Pst-BI-IS Cnt-1s-eat-E-IS ugali

(36)c. Jita: cha-a-li-ga n-chi-nyw-a-ga iisigala kuusiku. 私たちは毎日タバコを吸っていた。  
1pl-Pst-BI-IS Cnt-1pl-drink-E-IS cigarette everyday

ただし、ケレウェ語の新しい形式では、前部要素が aaliga という固定した形になっていて人称変化しなくなっている。この点について次に見てみよう。

### 3.2 ケレウェ語独自の変化形

ケレウェ語の〈遠過去・習慣〉の新しい形式は、ジタ語の影響と考えられる前部要素 S-a-li-ga をもつ分析的な複合形式になっているが、この前部要素はジタ語のように人称変化せず、どの人称がきても aaliga という形で固定されている。ジタ語やケレウェ語の本来の形では、(35),(36)の例にも見られる通り、この要素は必ず人称変化する<sup>15)</sup>。新しい形ではこの前部要素が aaliga という形で文法化されているのだが、これはケレウェ語の中でさらに進んでいく変化だと考えられる。というのも、実際、新しい形式 aaliga を用いる人は〈遠過去・習慣〉に限らず、〈遠い過去・進行〉や〈遠い過去・継続〉においてもこの aaliga という形を用いる。上に見た(13.a)の例は下のようになる。また(37)は〈遠い過去・継続〉の例である。

(13.a) n-a-li-ga ni-n-dy-a obwita. 私はウガリを食べていた。〈遠い過去・進行〉  
1s-Pst-BI-IS Cnt-1s-eat-E ugali

(13.a)' aaliga ni-n-dy-a obwita. (新しい形式)  
(FP) Cnt-1s-eat-E ugali

(37)a. n-a-li-ga n-ki-ly-a obwita. 私はまだウガリを食べていた。〈遠い過去・継続〉  
1s-Pst-BI-IS 1s-Still-eat-E ugali  
b. aaliga n-ki-ly-a obwita. (新しい形式)  
(FP) 1s-Still-eat-E ugali

新しい複合形式において前部要素が aaliga という形に文法化されつつあるのは、ケレウェ語独自の変化であるが、このような変化はケレウェ語の傾向なのかもしれない。というのも、〈今日の過去〉を表す複合形式においても、前部要素が sanga という人称変化しない形だからである。つまり、ケレウェ語ではこれらの前部要素が固定化される方向に変化しているといえないだろう

か。sanga を用いる複合形式の例をみてみよう。

(38)a. sanga ni-n-kol-a emilimo. 私は仕事をしていた。〈今日の過去・進行〉

(NP) Cnt-1s-do-E work

b. sanga a-ki-kol-a emilimo. 彼はまだ仕事をしていた。〈今日の過去・継続〉

(NP) 3s-Still-do-E work

c. sanga a-humw-ile. 彼は休んでいた。〈今日の過去・状態〉

(NP) 3s-rest-Prf

この sanga という要素は「会う」という意味の動詞から文法要素化したもので、本来の動詞としても用いられている。これも他のルタラ諸語では見られない形式で、ケレウェ語独自の革新形である。

ジタ語では〈今日の過去〉の複合形式の前部要素は〈遠い過去〉と同じく人称変化する。(38)と同じ例をジタ語でみてみよう。

(39)a. Jita: na-a-li ni-n-kol-a emilimu. 私は仕事をしていた。〈今日の過去・進行〉

1s-Pst-Bl Cnt-1s-do-E work

b. Jita: a-a-li a-chaa-kol-a emilimu. 彼はまだ仕事をしていた。〈今日の過去・継続〉

3s-Pst-Bl 3s-Still-do-E work

c. Jita: a-a-li a-chee-siis-iyē omwoyo. 彼は休んでいた。〈今日の過去・状態〉

3s-Pst-Bl 3s-Still-make breath+Prf(<a-chaa-isiis-iyē) heart

ジタ語の複合形式においては、〈遠い過去〉と〈今日の過去〉の前部要素の違いは、語尾-ga の有無による。ケレウェ語ではこのような〈今日の過去〉の前部要素に類似する方向には変化せず、sanga を用いる独自の形式に変化したのである。

### 3.3 その他の類似

3.2 のようにケレウェ語独自の変化も見られるが、ジタ語の形式をそのまま借用したようなケレウェ語も見られる。TA体系をまとめた表2, 3では肯定形のみを取り上げたので、否定形については触れなかったが、〈未完了〉を表す形式にジタ語を借用した形が見られる。

〈未完了〉を表す形式はそれぞれ以下の通りである。

Kerewe: Ti-S-ka-V-ile 〈現在・未完了〉

S-a-li-ga S-ta-ka-V-ile 〈遠い過去・未完了〉

Jita: S-chaa-li ku-V-a 〈現在・未完了〉

S-a-li-ga S-chaa-li ku-V-a 〈遠い過去・未完了〉



それぞれの形式において、ケレウェ語にジタ語に似た新しい言い方が見られる。下の例は、それぞれ(a)が本来のケレウェ語、(b)が新しい形式、(c)がジタ語の例である。

(40) a. ti-n-ka-li-ile. 私はまだ食べていない。〈現在・未完了〉

NEG-1s-FP-eat-Prf

b. n-cha-li ku-lya. (新しい形式)

1s-STILL-BI Inf-eat

c. Jita: ni-cha-li ku-lya. 私はまだ食べていない。〈現在・未完了〉

1s-STILL-BI Inf-eat

(41) a. y-a-li-ga a-ta-ka-fw-ile. 彼はまだ死んでいなかった。〈遠い過去・未完了〉

3s-Pst-BI-IS 3s-Neg-FP-die-Prf

b. y-a-li-ga a-ki-li ku-fwâ. (新しい形式)

3s-Pst-BI-IS 3s-STILL-BI Inf-die

c. Jita: a-a-li-ga a-cha-li ku-fwâ. 彼はまだ死んでいなかった。〈遠い過去・未完了〉

3s-Pst-BI-IS 3s-STILL-BI Inf-die

これらの新しい形式は、ジタ語の形式をそのままケレウェ語に写したかのような形になっている。やはり若い世代に多い言い方だが、〈遠過去・習慣〉の新しい形式に見られたように、前部要素が aaliga という形にはなっていない。それゆえに、これがケレウェ語の形式の変化であるのか、ジタ語の形式をケレウェ語の語彙で言い換えているだけなのかは、今のところ断言できない。しかしこのような借用を通じて、ケレウェ語の形式が変化していくと予測することはできるであろう。

#### 4. まとめと残された問題

以上、ケレウェ語のTA体系の形式について概観し、ジタ語と比較をしながらその形式の変化についてみてきた。ケレウェ語はウケレウェ島に移住してきて以来、ジタ語をはじめとするスグティグループの言語に接触し、その影響を受けて変化してきたと考えられるが、その一例として、〈遠い過去〉を表す複合形式を挙げることができた。〈遠過去・習慣〉以外の〈遠い過去〉のアスペクトはすべて分析的な複合形式で表されており、しかも前部要素はジタ語のものを借用している。さらに、〈遠過去・習慣〉も分析的な複合形式へと変化しつつある。また、ジタ語の形式をそのままケレウェ語で言い換えた〈未完了〉のような例も見られた。〈未完了〉の例については、偶然、観察された例に過ぎず、ケレウェ語の体系の変化を生じさせているものかどうかはま

だ分からないが、いずれにしても、このような借用を経てケレウェ語が変化し、その結果、さらに類似化が進むと考えられよう。

しかし、このような類似化が進めば、両言語は一つの言語のようになっていくのかというと、それは分からない。ケレウェ語にも独自の変化が見られ、全く同一化していくようにも見えない。Dixon も言うように、言語の変化は予測不可能であり、また言語以外の要因も作用するからである。話者が異なる言語だと認識するなら、類似化の現象の一方でその違いを強調し、差異化の方向へと意識が働くことも十分考えられるだろう。

今回は、十分に考察できなかった事項に、未来時制の複合形式がある。〈未来〉のアスペクト表示においてもケレウェ語とジタ語では類似した複合形式になっているが、〈近未来・習慣〉においては〈遠過去・習慣〉同様、複合形式になっていない。ジタ語においては〈遠未来・習慣〉のみが複合形式ではない。しかしこれらの形式において、分析的な複合形式へと変化するようすはみられない。これらの形式が類似化へと向かうのか、また差異を示すものとして残るのかなど、さらなる調査が必要である。

## 付記

本研究は、平成 13 年度科学研究費補助金（課題番号 11691013、課題名「北部中央バントゥ諸語の記述・比較研究」、研究代表：加賀谷良平東京外国語大学 AA 研究所教授）、ならびに同補助金（課題番号 12371001、課題名「現代アフリカ女性の開発プログラム参加と言語選択に関する学際的研究」、研究代表：宮本律子秋田大学助教授）により可能になった調査に基づいている。

## 献辞

本稿は宮本正興先生の還暦記念論文集に掲載すべく執筆したものである。本稿を含めたケレウェ語研究は 1997 年からはじめたタンザニアでのフィールドワークに基づいている。はじめにタンザニアでの調査を可能にしてくれたのは、宮本正興先生が研究代表をされた科研費による学術調査研究（課題名「東アフリカにおける地域共通語に基づく文化圏生成とエスニシティの構造」（1996～98 年度）である。その援助を得てこの研究をはじめることができ、幸いにも他の研究調査隊に参加させてもらいながら、ここまで続けることができた。私事をもう少し許していただけるなら、そもそも私を大学院進学へとお誘いくださり、研究の道を開いてくださったのが宮本正興先生だった。その学恩にどれほどこたえることができているのか甚だ心もとないが、先生の期待に背かぬような研究を続けていきたいと思っている。その決意とこれまでの感謝を先生に贈る次第です。

## 註

- 1) ケレウェ語は E24、ジタ語は E25 に分類されている。Eゾーンは後にそのメンバーを再編しなおされて Jゾーンとなっている。
- 2) 大湖語群はこれまで Inter-Lacustrine group (Bryan 1959) や Lacustrine group (Nurse & Philippson 1980) と呼ばれていたグループを含むものになる。大湖語群は地域的なまとまりをなす言語群の名称に過ぎず、系統関係によるものではない。類型的、語彙統計的基準によってまとめられている。下位のグループでは系統関係が明らかなものもあり、例えばルタラグループは一つの祖語から分かれた言語グループであることが証明されている (Muzale 1998)。
- 3) TA形式を表示する方法として、表 2、3 に示されているテンスとアスペクトの項目を並べて、〈テンスの項目・アスペクトの項目〉のように表示する。
- 4) 本稿でのケレウェ語・ジタ語の音素表記は次の通り。  
短母音 i, e, a, o, u、長母音 ii, ee, aa, oo, uu。  
アクセントは高低を区別し、高アクセント [ˈ] と下降アクセント [ˌ] のみ表記。  
子音 b [β, b/N], ch [tʃ], d, f, g, h, j, k, l [d/N], m, n, ng [ŋ], ny [ɲ], p, r, s, sh [ʃ], t, w, y [j], z。  
またケレウェ語の人称主格接辞は次の通りである。1s: n-, 2s: o-, 3s: a-, 1pl: tu-, 2pl: mu-, 3pl: ba-
- 5) ジタ語の一般の主格接辞と、接頭母音のついた主格接辞は以下の通りである。  
一般の主格接辞 1s: ni-/n-, 2s: u-, 3s: a-, 1pl: chi-, 2pl: mu-, 3pl: ba-  
接頭母音のついた主格接辞 1s: eni-, 2s: ou-, 3s: kaa-, 1pl: echi-, 2pl: omu-, 3pl: aba-  
3人称単数の接頭母音には k- という子音を伴っている。接頭母音は広くバントゥ諸語の名詞組織に見られるもので、名詞のクラス接頭辞のさらに前について、その名詞に「定性」を加える働きがあると考えられているが、それが単純形の主格接辞として用いられることの関連性についてはさらなる考察が必要である。
- 6) Taylor (1985) ではンコレ語の「過去」を本稿と同じく、remote past, yesterday past, today past とよんでいる。Nurse & Muzale (1999) ではハヤ語の「過去」を far past, middle past, near past と呼んでいるが、内容は同じである。
- 7) ジタ語の〈昨日の過去〉の形式は S-a-maa-V-a で、S には註 5) でみた一般の主格接辞がくる。二人称単数の主格接辞をとるこの例文は u-a-maa-gúl-a で、主格接辞の部分が渡り音になっても、wa- と短いはずであるが、実際にはやや長く発音される。
- 8) ジタ語の〈昨日の過去〉を表す接辞 maa- は、動詞 mala (終える) から発展したものだと考えられる (Nurse & Muzale 1999: 531)。
- 9) 「習慣」や「経験」が遠過去にのみ可能なのは、「習慣」や「経験」の意味が今日や昨日といった近い過去とは共起しない性質のものだからと言えよう。
- 10) Nurse & Muzale が大湖語群の〈近未来〉と〈遠未来〉の接辞に再建している形は \*laa- と \*li- である。しかし、ケレウェ語、ジタ語では、〈近未来〉は短い母音の la- である。
- 11) Muzale (1998) は〈現在・進行〉を表すルタラ諸語の祖形として、\*S-ri ku-V-a と \*ni-S-V-a の二つをたてている。前者が古く、後者が新しい革新形として広まったとしている。前者の -ri はいわゆる Be 動詞であり、ku- は不定形を導く接辞である。ケレウェ語の〈現在・進行〉の形式はこの祖形を残すものである。
- 12) バントゥ諸語では不定形の動詞は語幹と語尾 -a からなっており、〈現在・進行〉の末尾にもこの語尾 -a が見られる。習慣を表す接尾辞 -ga が動詞語尾 -a のさらに後ろに付加されるというのはおかしいかもしれない。普通、この接尾辞は -aga あるいは -ag- と分析されているが、本稿で -ga と分析するのは、次のような例があるからである。  
ex) o-ku-gend-a-yo-ga? あなたはよくそこへ行きますか。〈現在・習慣〉  
2s-Pro-go-E-there-IS  
動詞語尾のあとに場所を表す接尾辞 -yo が付加し、その後ろに -ga が続いている。すでに動詞語尾が前にあり、その後ろにもこの接尾辞 -ga が付き得ると考えることができよう。

- 13) ケレウェ語の〈遠未来・習慣〉の複合形式において、前部の最後に接尾辞-ga が付くかどうかは人によって揺れがある。
- 14) ケレウェ語の場合、3 人称単数の主格接辞に過去時制接辞 a-が続く場合、y-a-という形になる。
- 15) S-a-li-ga の人称変化は以下の通りである。
- ケレウェ語 : n-a-li-ga, w-a-li-ga, y-a-li-ga, tw-a-li-ga, mw-a-li-ga, ba-a-li-ga。
- ジタ語 : na-a-li-ga, wa-a-li-ga, a-a-li-ga, cha-a-li-ga, mwa-a-li-ga, ba-a-li-ga。
- ケレウェ語の新しい aaliga という形はケレウェ語には見られず、ジタ語の 3 人称単数の形と同じであるが、これがそのまま借用されているのかどうかは断定できない。

## 略号

appl: applied suffix	(NP): near past marker
Bl: be 動詞語幹 (li)	OP: object prefix
Bb: be 動詞語幹 (ba)	pl: plural
Cnt: continuous prefix	Prf: perfective suffix
E: verb ending	Pst: past prefix
FF: far future prefix	Pro: progressive prefix
FP: far past prefix	S: simple form nominative prefix (Jita only)
(FP): far past marker	s: singular
FPrf: far perfective prefix	Still: persistive prefix
Inf: infinitive marker	STILL: persistive prefix (Kerewe present tense only)
IS: intensive suffix	Yps: yesterday past prefix (Jita only)
Neg: negative prefix (subordinate)	1, 2, 3: nominative/accusative prefix (person)
NEG: negative prefix (verb phrase initial)	
NF: near future prefix	

## 参考文献

- Bryan, M.A. 1959. *The Bantu Languages of Africa*, London: International African Institute.
- Dixon, R.M.W. 1997. *The Rise and Fall of Languages*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hombert, J-M. & L.Hyman(eds). 1999. *Bantu Historical Linguistics*, Stanford: CSLI Publications.
- 小森淳子 (1998) 「多民族社会における言語使用の実際ータンザニア、ウケレウェ調査報告ー」、『スワヒリ&アフリカ研究』8号、1-27 頁、大阪外国語大学スワヒリ語・アフリカ地域文化研究室
- Nurse, D. 1999. "Towards a Historical Classification of East African Bantu Languages", in J-M. Hombert & L. M. Hyman (eds.) 1-42.
- Nurse, D. & H. Muzale 1999. "Tense and Aspect in Great Lakes Bantu Languages," in J-M. Hombert & L. Hyman(eds), 517-544.
- Nurse, Derek & G.Philippson. 1980. "The Bantu Languages of East Africa: A Lexicostatistical Survey", in E.C.Polome & C.P.Hill(eds.) *Language in Tanzania*, 26-67, London: Oxford UP.
- Rubongoya, L.T. 1999. *A Modern Runyoro-Rutooro Grammar*, Cologne: Rüdiger Köppe Verlag.
- Schoenbrun, David. L. 1990. *Early History in Eastern Africa's Great Lakes Region: Linguistic, Ecological, and Archaeological Approaches. ca. 500 B.C. to ca. A.D.1000*. Ph D. dissertation, University of California LA, UMI.
- Taylor, C. 1985. *Nkore-Kiga*, London: Croom Helm.